

● 事例紹介 ●

事例「金融経済リテラシー研修」

「ねらいと効果」

船山 育男

(東京農工大学 キャリアパス支援センター コーディネーター)

当センターは、文部科学省が行う「科学技術関係人材のキャリアパス多様化促進事業」の平成一九年度採択機関です。昨年八月一日に発足し、博士後期課程学生、ポスト・ドクター等を対象に、キャリアプランにかかる諸研修や助言、および多様なパスの斡旋を事業として展開しています。諸研修には企業経営管理者交流、国際交流、金融経済等の各プログラムがあり、ここではその金融経済プログラムを紹介します。なお、筆者は証券会社よりコーディネートの任務で特任教授として出向しているものです。

プログラム・内容

場所・野村證券(株) 投資情報部・会議室  
 時間・午前九時から午後五時までの二日間  
 ・六名の講師団にはコマ毎に受講者持参の経済新聞を必ず対照していただくことをお願いしました。  
 ・演習時間はコーディネーターが担当しました。

一日目

△第一講▽

- 一、投資に役立つ経済新聞の読み方
- ・投資を考えるのに欠かせない記事は？

・経済新聞の読み方のコツ

- ・第一面で経済や企業のおおまかな動向をつかむ
  - ・「総合面」でニュースの背景を理解する
  - ・「経済面」で経済の大きな流れをつかむ
  - ・「国際面」で世界経済にアプローチする
  - ・「企業面」で業界・企業の最前線の情報を捉える
  - ・「投資・財務面」で企業の業績動向を把握する
  - ・「マーケット総合面」で金利・為替の動向を捉える
  - ・「マーケット総合面」で株式市場の動向を捉える
  - ・「商品面」で素材価格の動きを知る
  - ・「消費面」で新商品情報をチェックする
  - ・その他日曜、月曜版、土日の別刷り版の読み方
- 二、貸借対照表(B/S)、損益計算書(P/L)およびキャッシュフロー計算書の見方

- ・財務諸表とは
- ・B/SとP/Lの構造
- ・財務状況を見る
- ・損益状況を見る
- ・具体的に考えて見る(モデル)健全性と成長性
- ・経営の効率を見る
- ・現金の動きを見る

・一株当りの指標

- ・実際の決算短信を見る
- \*演習
- ・今朝の新聞記事を見て、掲載記事企業の株価の上下を想定する
- ・自分のB/SとP/Lをつくる

三、会社四季報の見方

- ・サブプライム問題をB/Sを使って考える
  - ・株式投資の基本
  - ・銘柄選択の考え方
  - ・会社四季報の内容と活用
  - ・財務諸表からわかる企業活動
  - ・一株当りの指標
  - ・株価のバリュエーション(割高・割安)を考える
  - ・株主還元
  - ・資本移動
  - ・実際の会社四季報を見比べる
- △第二講▽: 「虫の目」で経済を見る

- 一、企業価値分析の実際
- ・資本主義市場経済の資源配分システムとしての主要な特色

- ・ 一定成長配当割引モデル
- ・ P/LとB/Sの連関関係
- ・ 利益と株価の関係
- ・ 今朝の新聞から

\*演習

- ・ 株価トレーディングと株式投資
- ・ 午前演習時の株価想定<sup>1)</sup>の検証、その理由
- ・ 有望銘柄選択と就職企業選択

二日目

△第三講V:「鳥の目」で経済を見る

一、マクロ経済分析の実際

二、投資環境判断の実際

- ・ 経済の相互関係
- ・ 景気循環とそのメカニズム
- ・ GDP統計の内容(指標)とその見方
- ・ 経済の将来を予測する技術

\*演習

- ・ 構造変化と循環のちがひ
- ・ 労働市場の構造変化
- ・ 投資と回収

△第四講V:「魚の目」で経済を見る

一、定期刊行「月刊資産管理」編集の実際

- ・ 編集の流れと情報鮮度
- ・ 見せ方の工夫

二、投資セミナー「Nomura21」の実際

・ 実演とプレゼンの工夫

△修学旅行V

- ・ 日銀貨幣博物館見学

企画の動機

就職相談時に以下の会話を交わし、支援の本質および研修の課題について深く考えさせられたことから、この企画を提案しました。

「○○(株)が第一志望だが、イマイチ惹かれない。何かいい指標はないか? / 面接の際、「一〇年勤めたらまた大学に戻りたい」と正直に答えた / 博士の人は視野が狭いと言われた。外部との折衝とかいろいろやったのに: / 三七歳と聞くと(面接担当者が)ヒクのがわかる / 学部卒で就職した同期の人とくらべて足りないものは何か / 結婚はしたいが、就職先が見つからないし:」

キャリアデザインとは、自らが、自分の夢や専門性、性格や適性等をよく見つめ、「経済社会」との関わりを将来的に考えることに他なりません。ならば、経済社会をよく知ることが重要な要件となりますし、博士の場合は(経験や年齢を考えますと)その経済社会から自身がどのように見えるかを考えることも大切と思われまます。

研修のねらい

研修コンセプトを「経済新聞が読める」とし、その目的を以下の四項目としました。

①ビジネス社会の共通言語を知る

発明対価裁判、知財、大学発ベンチャー:アカデミアであれ市場経済の中に存在している現在です。その他の研究者マネジメントにおいても同様です。企業人は勿論のこと、およそ如何なる立場であろうとも基礎的なビジネス言語の習得は必須と考えられますし、社会的地位が高まるほどその必要性は増すこととなります。現実には社会のリーダーの多くが経済新聞を購読しています<sup>1)</sup>。

②研究分野の市場位置を知る

取組んでいる研究からその関連、応用分野や就職先を考えると限定的になりがちです。逆に、広い経済社会(とり

わけ株式市場)から取組んでいる研究を眺めると、その応用範囲は広がって見えます(筆者はオプトエレクトロニクス関連の企業を訪問した際、花粉の研究者を求めていることを知りました)。市場とは資源(ヒト・モノ・カネ)配分の最適効率のための手立てでもあります。市場からの俯瞰は研究の継続にとっても意味あることのように思えます。

③自己PRに幅と奥行きを加える

「最近の関心事は何ですか?」採用面接時に聞かれて困る質問の一つだそうです。質問者にとっては社会性や専門性、プレゼン能力等々を一気に判断できる効率的設問でありましょう。社会性ある話題(課題)を選択し、その理由や展望、解決への道筋などを自身の専門分野から言及し、しかも「空気を讀んだ」時間の中に収めなければなりません。更に、追加質問を想定し、対応できたら最高です。広い経済社会の情報収集は不可欠であり、上手に整理できていれば、「三七歳」も大いなる武器たり得ると思うのです。

④株式投資がわかる

新聞の読み方もビジネス言語も、上達のコツはリアリティーを持つことです。擬似的であれ、株式投資を想定することはリアリティーの近道と考えられます。ところで、トレーディングと投資とは本質的に異なりま

す。株式投資を考える時、企業もまた繁栄と衰退との間に存在することに気づきます。世界経済↓日本経済↓産業界という投資環境を吟味し、企業の将来価値を考えることは、就職企業の選択と重なるものが少なくありません。各社の中期経営計画にはその会社の将来像や課題が記載されています。これらに関し自身の専門性が如何に関われるのかを考えることは、自己PRにも重要と思えます。なお、財務諸表等にはヒトの要素はありませんので、惹かれるための指標はないと考えたほうがよさそうです。先輩訪問や面接者などで「カッコイイ人」が見えたかどうにかかるように思います。

演習のねらい（経済から見るポスト・ドク問題）

当日持参の新聞を題材に、「ポスト・ドク一万人計画」の意義を国民経済の視点から確認するとともに、現在の労働市場や企業行動についても考えられるようにしました。

①投資回収意識

経済学は教育を投資と考え、その教育投資行動を説明する理論モデルとして「人的資本理論」と「シグナリング理論」が知られています。前者に従えば、「博士」とは高度な専門的知識・技術を獲得し、高い生産性や収入をもたら

す「資本」を装備した人ということになり、後者に従えば、「博士」とは高い能力を知らしめるシグナルということになります。

ところで、投資とは回収を目的としています。国民経済的には価値の創造者として回収するか、高度な消費者として回収するかです。また、家計者としては経済的自立や高収入、または博士としての名譽感などが回収の目的と考えられます。この意味で、いわゆる「ポスト・ドク問題」とは国民経済的にも家計的にも回収の問題とも言えます。就職企業の「第一志望」という素直な表現は、進学を選択と就職企業選択がほぼ同質に意識されているのではないかと、即ち、投資機会と回収機会との認識差がやや希薄なのではないかと気になるところです。

②回収市場の現実と展望

アカデミアにおけるポスト不足や任期付き採用はこの回収機会を狭めています。また、アカデミア以外にその機会を求めれば、「博士」は高能力資本装備者というシグナル効果を十分に発揮できていない可能性があります。むしろ、「使にくい」「視野が狭い」の評は「逆シグナル」を意味しています。これを、俗説と片付け、「企業はもっと積極的に採用すべき！」と叫ぶことはカンタンですが、結婚す

効果判定

研修告知は実験的にH/Pおよびポスターのみとしました。結果、受講者は一二名でポスト・ドク、博士課程学生、社会人学生それぞれに偏りはありませんでした。

効果判定は、今後の研修回数および受講者のトレースによってなされるべきと考えていますが、以下に受講後アンケートへの書き込みの一部を紙面の範囲で紹介致します。  
 ・複数の研究機関を渡り歩いた結果、研究だけでは生きてゆく能力が身につかないと感じていました。社会全体が見渡せる規模の会社に非研究職で就職し、実際の経営感覚や生きてゆくための力を身につけたい。  
 ・経済発展と高カロリー食品消費の関係を知り、自分の研究分野の立ち位置が分かりました。経済知識と専門知識が合わることで物事を複合的に考えられる事が分かりました。

・経済に関わる人々が利益やカネだけでなく、国家や民度の上昇を考えていることが分かり考えが変わりました。  
 ・一つの記事も人によって見方が異なり、様々な視点でそれぞれの人が論理立てて考えたことを聞くのは興味深く、勉強になりました。

・親や周りの人の投資で作られた「私」という資本、これ

らできないという現実を解決することはできません。将来を展望する時、国家財政問題や道州制の議論、少子化問題やサブプライム問題等々：これらと無関係ではありません。研究費の将来や「戻りたい一〇年後の大学」を展望する力を養うことと、即戦的・個別的な対策が喫緊の課題と考えられます。

③コミュニケーションとは企業内だけのものではない

「二〇〇七年度・新卒者採用に関するアンケート調査結果」<sup>②</sup>によれば、選考にあたっての重視点（複数回答）の第一位はコミュニケーション能力（七九・五％）、第二位に協調性（五三・〇％）、第三位が主体性（五一・六％）となっています。主体性を持ち協調するコミュニケーション能力こそが企業が求める人材ということになります。

さて、この「コミュニケーション能力」を企業内部だけのものと捉えがちですが、お客様とコミュニケーションができるかどうかが最も重要なのです。お客様がいらない企業はありません。企業の生命線です。（会ったお客様の数と接触の緊張度が学部卒との違いと言えましょう。）

ところで、採用担当者の最大のリスクは採用者の退職です。「納得がいく貢献ができるまでは辞めない！」就職面談は正直よりは誠実を旨としたいものです。

から回収にまわれるようアンテナをはって人生を考えなければいけないと感じました。

- ・株式投資に対するイメージが一変しました。
- ・自分の研究分野にも「調達」「運用」「回収」という考え方を取り入れてゆきたい。
- ・後輩たちのためにこの研修を続けてほしいです。

文献

- (1) 週刊 東洋経済、四月二二日号、P三六―四一(二〇〇八年)
- (2) 二〇〇七年度・新卒者採用に関するアンケート調査(社) 日本経済団体連合会(二〇〇八年二月一日発表)
- (3) 東京農工大学ホームページ  
URL: <http://www.tuat.ac.jp/~career-c/>